

## 進路選択：努力とセレンディピティ

平田 彩子（法学部）

法学部で、法社会学・現代法過程論を担当している平田と申します。進路の選択に悩みはつきものです。この文章をお読みになっているみなさんは、駒場の1、2年生と想定していますが、進路選択というタイプの意思決定は、いわゆる「進振り」の時期のみならず、その後の人生でも、さまざまあります。例えば、就職するか・院へ進学するか、何らかの資格勉強を始めるか、就職するとしてもどの業界の、どの会社にするか。また、社会人となったのちも、自分はどの分野で専門性を磨き、自らの強みを育てていくか。このように考えると、広義での進路選択はキャリア選択でもあり、今後の人生でも絶えず行う必要があることがわかります。ここでは、とりあえず目前の「進振り」に焦点を絞しつつ、私のケースやそれをもとにしたアドバイスを書いてみたいと思います。しかしその際は、できるだけその後の広義の進路選択の意思決定においても当てはまるであろう、一般的なアドバイスにも応用可能なものであればと思っています。読者の皆さんの進路選択において一助となれば幸いです。

まずは私のケースから。私は高校生のときから、文庫本よりも新書が好きなタイプでした。また新聞にも毎日目を通していましたが、好きな面は、総合面・政治面・社会面、そして論説部分という好みでした。社会における人間の行動のあり方や、社会問題に漠然と興味を惹きつけられていたのだと思います。高校生の私は、格差や不平等の問題、環境問題など、社会問題の解決に関して何らかの関わりができる職業につけたらいいなと思っていました。加えて、法は社会における道具であるから、その道具の使い方を身に付けておくのは役に立つであろうという考えもありました。企業や経済活動、文学に対しては強い興味をそそられなかったため、文系であった私はなんの疑問もなく、法学部志望となり、文科一類に入学しました。

今から思えば、法学部は文学を学ぶところで、自

分は文学に興味はないから文学部に行かないと考えた高校生の私は情報不足だったと思います。文学部という名称の学部から、何も疑問を抱かず文学のみを学習対象としていると思い込んでいましたが、実際は、社会学や心理学もあります。当時そのことを知っていたら、社会学を学びたいと思ったかもしれません。（ちなみに、仮に高校生の私が文学部についてより詳細な情報を得ていたとしても、やはり最終的には法学部志望になったかと思います。社会問題への対応のためには、法を含めたさまざまな形のルールが存在と、それを形成・運用する人々・組織が必要不可欠であり、それを学習対象とするのが法学部であって、私はこのルールと社会の関係性に興味を惹かれたからです）。

法学部の場合も、学部の名称は法学部となっていますが、そこで学ぶことは、法学に限定されません。重要な領域として、政治学もあります（法学部の教員が所属するのは、「法学政治学研究科」という名称の大学院であり、ここでは政治学の存在も明記されています）。また、法学という分野においても、民法や憲法といった法の解釈適用を行う分野のみならず、私が専門としている法社会学や、法哲学などもあります。このように見ると、学部や学科の名称から受けるイメージのみで判断するのではなく、潜在的な進路先についての情報収集を行う必要性があることがわかります。情報を収集する過程で、当該学部・学科は実際どのようなことをしているのか、自分は何に興味があるのかという問いに対し、反芻しながら考えることとなり、そのプロセスを通じて、ある程度、進路希望の範囲が絞れてくるのではないかと思います。情報収集のやり方は色々ありますが、駒場で提供されている専門科目の授業を履修することが、簡便かつ信頼性の高い情報を手にいれる方法かと思います。授業担当の先生とのやりとりを通じて、進路相談をすることも可能でしょう。ちなみに、法学部も駒場で授業を提供していますので、読者の中で興味がある方はぜひ履修してみてください。

ここまででのアドバイスは以下の点にまとめられます。すなわち、進路選択の判断をするためには、できるだけ情報収集をして、①当該学部・学科では実際何を勉強するのか、②自分のパッションはどこ

にあるのか、という2つの問いに対して、できるだけ自分なりの結論を出しておくことです。人によっては、より現実的な考慮も入ってくるかもしれませんが。例えば、どの分野に進めば、より就職が有利になったり、経済的に恵まれた職業につけるのか等です。進路選択の意思決定の際は、できるだけ進路に関する情報を持っていた方が良いのは、読者の皆さんも容易に納得できるでしょう。

さて、私からのアドバイスの2点目は、以下のことです。すなわち、可能な限り情報収集をしたあとは、最終的に「えいや！」と決めることです。換言すれば、可能な限り情報収集を行なった後で手元に残っている選択肢からの選択は、必要以上に悩まなくて良いということです。その理由として以下の3点が指摘できるでしょう。第1に、行ってみないとわからないことが多いからです。例えば、私の場合、法学部に進学する前にどれほど法学・政治学のことをわかっていたかといえば、ほとんどわかっていたと言えません。実際に自分が行ってみて、学び経験したあとに、自分がどういう場所にいるのか、自分の業界について見えてくるものです。事前に情報収集をすることは非常に大切である一方で、その限界もあります。ですので、最後は「えいや！」と決めることが大切です。第2に、どういう人に会うのか、どういう機会に恵まれているのか、この点は、キャリア形成の過程において非常に重要であるにも拘らず、偶然性に寄るところが大きく、事前には予測不可能なものです。人との出会いが自らの成長に大きく関係します。指導教員、先輩という出会いもありますし、新しい友人との出会い、競争相手との出会いもあるでしょう。また、自分が興味関心を持てる新たな問題を発見するかもしれません。人生は、このような予期せぬセレンディピティに散りばめられています。この点からも、最後の決断は悩みすぎずに、「えいや！」と決めることに対して全く問題がないことがわかります。事前にそのようなセレンディピティの有無と内容は予測不可能だからです。第3に、自分自身も、時とともに変化するということです。今は〇〇に興味があるけれど、学習の過程で、また社会環境の変化を通じて、△△について興味を持つようになった、ということはよくあること

です。ただ事前には、自分が変化するのか、どのように変化するのかはわかりません。現時点で唯一の「正解」をどれほど選択しようかと悩んでも、あまり意味がないことはこの点からもお分かりになるでしょう。

私からの最後のアドバイスとして、以下の点をあげます。それは、どの進路選択を行なったにせよ、選択後は、その選択した領域で、惜しまず努力をするということです。これが最も大切なことだと思います。「この進路選択は正解だった」かどうか、それは、選択した時点で決まっているのではなく、選択の判断後に、自分がどれだけ努力をし、その分野の基礎的知識を身につけ、応用力を養い、また新たな問題意識の涵養を行うことができるかにかかっているとと言っても過言ではありません。これは、点数が足りずに第一希望の進路選択が叶わなかった場合にも言えます。人気の進路は当然競争率が高いです。全員が第一希望の進路に進学できるとは限りません。もちろん、試験の点数を少しでも上げる努力は行うべきですが、仮に第一希望の選択ではない結果になったとしても、そこで腐らずに進学先の分野を学ぶ努力をすることで、将来「正解」になる可能性はとても大きいと思います。「正解」は実はいくつもあるのかもしれませんが。あるいは、自分で創り出すものなのかもしれません。自分がすべき、目の前のことを真面目にコツコツと取り組み努力を惜しまないこと、これが私からの3点目のアドバイスです。

以上の文章が少しでも皆さんのお役に立てば幸いです。『進学情報センターニュース』のバックナンバーでは、他の先生方の書かれた文章も読むことができますので、読まれると良いかと思います。ご自身が理系であれば文系の先生のもの、自身が文系であれば理系の先生のものなど、自分の興味分野から離れた先生の記事を読むことを特にお勧めします。分野が全く異なっている場合でも、先生方がおっしゃっていることは、実は共通していることが多いということにも気付かれるでしょう。皆さんの今後のご活躍をお祈りしています。